

変法運動と格致新報

深 澤 秀 男

はじめに

1. 格致新報の発行
2. 格致新報の組織と機能
3. 格致新報の内容
4. 格致新報の参加者
5. 格致新報の意義

おわりに

はじめに

本小論においては、変法運動における報館の役割の一例として、学問的報館である『格致新報』を取り上げる¹⁾。

『格致新報』は、光緒24年2月21日に上海新北門外の天主堂街29号において、自然科学の雑誌として発行されたが、その経緯について考察し、ついで、『格致新報』の組織と機能について述べ、さらに、その内容、参加者、意義についても触れておきたい。

1. 格致新報の発行

『格致新報』の第一冊の表紙によれば、その発行は1898年3月13日、光緒24年2月21日であり、場所は上海、新北門外天主堂街29号であった。仏語、英語では、それぞれ REVUE SCIENTIFIQUE, SCIENTIFIC REVIEW であることが知られる²⁾。

また、「格致新報縁起」によれば、

天地が分れ、万物が胚胎し、天地の間に皆、物が盈ち、天地の間に、皆、学問が盈ちている。人が学ばなければ、どうして人たるべきであろうか。学んでも理を窮めなければ、どうして学問を為すに足りるだろうか。泰西の学は派別、支分して、兵、法、商、政、造船、造器から、農、漁、紡、織、牧、鋌に及んでおり、一つとして、学んでいないものではなく、精しくないものはない。その起点を推原すれば、大むねは、目の初歩的な理論から、偶然に悟って、遂に新奇をひらいた。ワットが水の沸くのを見て、蒸気機関を悟り、ニュー

1) 『格致新報』に触れた著書、論文にはつぎのものがある。

戈公振『中国報学史』香港大平書局 1964。

深澤秀男「変法運動と報館」(『集刊東洋学』45 1981所収)

2) 『格致新報』第1巻表紙。

トンは、リングが地に落ちることから、引力を悟ったというのは、その証明である³⁾。

とまず、述べられており、ヨーロッパでは、それぞれの学問が発達し、初歩的な理論から、深い学説を悟っている様子が知られる。

ついで中国の格致の学について述べ、

吾が中国の格致の学については、説く者は、秦火の災に遭い、その伝を失なったといっており、論ずる者は、みな遺憾な事としている。しかし、その書がすでに失われたといっても、その理は常に存していることを知らない。書は時に滅びることがあっても、理は、時日を久しく経過しても磨滅しない。格致が亡われたのは、始皇帝によってではなく、実に魏晋によってである。その時、教化は夷を浚いだが、風俗は頹敗し、佞老の異説は、中原を横塞した⁴⁾。

といわれており、中国の格致の学がうしなわれたのは、秦火ではなく、魏晋の佞老の異説であるとされている。

ついで、南宋の朱子について、

南宋におよんで、新安の朱子が東南から起って、佞老の非を斥け、『大学』の欠を補った。そこで言うのに『大学』は教えを始めるに当って、学ぶ者に凡そ天下の物は、已知の理に因らないものはないとしている。そうして、ますますこれを窮め、その極に至るのを求めるのが、格致入門の要道である⁵⁾

といわれており、南宋の朱子が『大学』の欠を補うに至って、天下の物が已知の理によっていることを説いているのが、格致入門の要道であるとしている。

ついで、

報の値は安く、やや有力な者から均しく購閲を得ており、また、日に新義を標し、学者におくっている。そこで、欧米では、日に報が盛んに行われ、飛ぶように売れている。その名を考えると、士、農、工、商、教育学と医、法学の種目がある。その体を別にして、新政異聞、近事広告の分があり、その中で格致に最も有益な者は、学問報にしくものはない。常に問答一条を設け、学ぶ者に疑って問わしめ、問わせてその者を啓発する。方法は美しく、その意図も良い。

人材が多く起こるのも実にここから始まっている。今、中国の時務、農会、蒙学、算学、の各報が踵を接して提唱し、海内の士は、益を得ることが大変多い。しかし学問報に做る者は、依然として欠いている様だ。そこで、始めて道を開き、広く風気を開いて、大いに中国の人材を興そうと欲している⁶⁾。

3) 同前第1巻1葉。

4) 同前

5) 同前

6) 同前

と述べ、学問報を発行して、中国の人才を興そうとしている様子が見られる。これについて、格致を深めるためには、西洋の学問を学んだ者を学問報に参加させることの必要性を述べ、フランスのカトリックの宣教師向、賈の両氏を挙げている。

また、『格致新報』の内容については、

格致の2字は、甚だ広いものを包括しており、初歩的なものでは、日用飲食の間にあり、深い所では、実に富国強兵の本である。

一に曰う。性理である。道を探して大原を行き、真偽を弁理するものである。一に曰う。治術である。公法、律例、条約、税則を論ずるものである。一に曰う。象数である。恒星、天文を究め、測量、製造するものである。一に曰う。形性である。4項に分ける。声光、電気、水熱、重力の諸事は、物性に所属する。金銀、木炭、鳥獸、血肉の諸事は物理に所属する。質点、凝動、変化、分合の諸事は化学に所属する。薬性、病状、人体骨架の諸事は医学に所属する。史伝、地誌、戸口、風俗に至っては、世故の得失、政教の成敗を見るに足りるので、別に紀事一門に帰す⁷⁾。

とあり、『格致新報』の内容は、真偽を弁理する性理、治術、象数、形性を取り上げ、形性には、声、光などの物性、金銀などの物理、質点などの化学、医学があり、その他に史伝などの紀事が考えられていたことが述べられている。

そして、最後に、他日、新学等を開く時はこの報が基礎になるので、足りない所を教えて欲しいとあらまし述べられている⁸⁾。

また、「格致新報館啓」によれば、

国は治において興り、治は学を端としている。袋に入った立派な実は、衆くの理を胚胎しており、学問の本である。あまねく貫いて分れ通じ、前例にならって明析であり、知行や言がさかんになるのは、学の効である。だから外国の巧を迎え、我が国の拙を守るべきである。相去るの数は、千に倍するので、格致一学が首務となる。

と述べられており、中国を良く治めるために格致学の必要が説かれている。

最後に、まず、格致の諸学を訳録し、ついで格致の諸学の語の問答を記録し、付録としては、西人の論説、中国人の論説、中西各国の近事を述べようとしていたことが知られる。

2. 格致新報の組織と機能

『格致新報』の広告である「本館告白」によれば、1条から6条までは、

1. 本報は、1部ごとに年間の売り値は4元で1冊ごとに1角3分で売る。郵便局の無い所では、代理店から郵便料を加える。閱者は、必ず、数に照して先に代金を支払う。

7) 同前2葉

8) 同前付録

概ね掛売りはしない。代金を支払った後、本館或いは、代理店が、受取証を給し、証拠とする。ここで全年を郵便購読する者は、原局から受取証を帯転して、誤らない。

1. 本年は、うるう月があるので、2月から始めたといっても全年を計算する。
1. 凡そ、代理店は、雑誌の定価から2割を取って、経費とするのを許す。報の為替金を取り立てる場合は、内にあって、ほしいままに定価に加えたり、酒資を索取するなどの事情はあってはならない。
1. 本報の第1冊は、すべて進呈し、お金は取らない。それ以後、各代理店は必ず先に報費を送り、そのあと報を送る。もし、定額の外に万一の時の需要に備えるために多く報数を欲する場合は、必ず、代理店によって、報資を本館に送り、欠けたり、おくれたりするのを絶やす。
1. 凡そ、郵便で本報を購入する者は定価に照らして、割引きはしない。遠過ぎる処は、別に郵送料を加える。
1. 凡そ、手紙を送って疑を問う者は、郵送料を先に支払う⁹⁾。

とあり、『格致新報』の定価は通年で4元、1冊、1角3分であり、代理店は2割の手数料を取ることができること、郵送料も必要に応じて支払うことなどが明らかにされている。ついで7条から13条までには、

1. 本報の訳す所の西書は務めて、時下名彦の著す所で中国を興こすのに有益な者を取る。報中に登せる所の書籍は、大むね、割載しないで比較的紙面を長くして一期とする。ことごとく登載できなければ、段ごとに結末した所で留め、語句を分けて、閲覧者に興ざめさせないようにする。
1. もし、西学に心を打ち込み、時務を洞識して著した大作があれば、どうかその書を明らかにされんことを祈る。住所を郵便で知らせるか、来館して欲しい。刊行してひろめられたものを出来るだけ多く集め採録し、継続して格致新報に登せる以外は再び経世文編に類別して門に分け、不朽のものとして残す。
1. 本館の刊報と別に刊行してひろむべき本があればすぐに手紙で中西の官憲に登録を請う。もし翻刻あるいは面目を改換し、他書と彙刻するものがあれば、査出して必ず究める。
1. 華士で西学の実験の器具を購入したい人があれば、本館が代りに欧州に手紙を出し購入する。但し、必ずまずその価格の半額を繳めること。
1. 本館は、経費が稍充ちるのを俟って、1学会を立て、各種の器具を陳設し、毎月、2、3回教士によって主に実験を行う。
1. 本館は並びに在外招股の事情により館中の司事がなく、またこの事を経介する者が

9) 同前第1巻28葉

いない。尙、射利の徒で、外に在って揺を招くなどの事情があれば、どうか閱報の諸君は深く察核を加えられんことを願う¹⁰⁾。

とあり、中国を興すのに有益な書物を報に載せ、或いは別に発行したり、学会を作って実験をしようとしている様子が知られる。なお広告は第1冊から第12冊のすべてに見える。また、『格致新報』の付録の「售報章程」にも同様の記事が見える。もっとも、学会の設立については触れておらず、紙質の事などに言及されている。

次いで、格致報館の售報処は以下の通りである¹¹⁾。

上海新北門外天主堂街29号本館

京都琉璃廠土地祠内総招局張小翁

京都大柵欄鐘表鋪李君縁

京都順治門内象房橋辺西学堂張菊生

京都宣武門天主堂後門義塾中趙秀珊

天津鍋店街文美齋書坊

天津沽衣街播威洋行蔣静軒

蘇州盤門外閩門外大東新利小輪公司

蘇州北街天主堂

常熟城内寺前街瑞泰洋貨号

無錫三里橋同昌棉子行周維新

通州招商局陳楚濤

江陰招商局黃巨川

泰興招商局馬璧臣

鎮江招商局朱煦亭

鎮江天主堂殷乘翁

揚州電報局盛我盤

揚州缺口門天主堂王正翁

如皋北門丁家巷儲馨遠

蕪湖電報局王叔英

蕪湖電報局王賦秋

無湖陡門巷後二街維新招公司

安慶電報局彭新三

九江電報局

10) 同前29葉

11) 『格致新報』の第1冊～12冊の各卷末に見られる售報処をまとめたものである。

九江八角井孫詞臣
漢口黃陂街江左書林陳霞裳
漢口沈家廟恒昌公吳少雲
沙市招商局劉志希
京城時務報分館
四川成都府雙柵子畫館吳悼翁
泰州南門烏巷天主堂姜贊翁
沙市天主堂周昌翁
荊郡天主堂田國翁
宜昌天主堂
湖南省城時務學堂
寧波招商局
寧波諸衙弄支心公所
寧波舟山天主堂孔仁翁
七寶劉雨香翁
嘉興南門蓮花橋軍機大臣工部尚書錢第
福州中州裕昌木行
福州城內雙門前清華軒茶葉店
沙市新閩劉英和
宜昌招商局金雅泉
河南省城時務學堂李一琴
杭州豐禾巷前浙江杭嘉湖道宋公館
杭州硤石正源信局
杭州上租廟巷項公館
杭州弼教坊瑪瑙經房間壁譚寓
杭州水師前直街体仁醫院曹思翁
江西省城馬王廟背後德隆醬園內陶菊如
江西經銷時務報處汪漱翁
南京下閩招商局莊椿山
南京城內中正街蒯理卿
松江城內邱家灣天主堂
上海華英大藥房各處分設分售之處均承張集成翁函知代派
紹興水潤橋潤墨堂書坊

英界老巡捕房対門広学会王文翁

湖北府街口時務報分館翟声翁

広東省城南門内雙門底聖教書楼左斗山翁

広東省城南門内雙門底下街知新中西書局朱夔翁

香港文武直街文裕堂書房楊福翁

3. 格致新報の内容

『格致新報』第1冊から第12冊の総目次は以下の通りである¹²⁾。

格致新報縁起 青浦朱開甲撰

格致初枕序 臨川姜、顛撰

格致初枕第一卷動物学 甬江王顛理訳

第四卷格物学

学門之源流門類 法國向愛蓮著

楽在居侍者訳

論鐵路之利益 全上

論徳皇之志不在膠 楽在居侍者撰

答問 法國向愛蓮答

格致新義 甬江王顛理訳

甬江陸悦理口訳

時事新聞 錢塘項藻馨

鎮江朱 飛筆述

校勘記

本館告白與售報處

通語言為中国当務之急論 愛蓮室主人述意

楽在侍者纂辞

論游歴為国家之要道 愛蓮室主人著

甬江王顛理訳

論開礦之益不及墾荒 上海王豊曾撰

格致新義 甬江陸悦理

鎮江朱 飛 全訳

論今古字法 愛蓮室主人著 甬江王顛理訳

論人之記性 愛蓮室主人著 楽在居侍者訳

12) 『格致新報』の第1～第12冊の各巻初に見られる目次をまとめたものである。

裁冗兵以練精兵議		上海王豊曾撰
格致新義	法文	張文彬 上海 朱維新 全訳
論欧州和局非中国之福		上海王豊曾撰
字碼說	愛蓮室主人著	甬江王顯理訳
西字辨	愛蓮室主人著	甬江王顯理訳
白 煤	愛蓮室主人著	甬江王顯理訳
停武科私議	上海王豊曾撰	
中国方言考	甬江王顯理訳	
論弭兵会	愛蓮室主人著	楽在居侍者訳
測經度法	愛蓮室主人著	甬江王顯理訳
通貧富說	宝山林善貽撰	
論火	愛蓮室主人著	楽在居侍者訳
息争說	上海樊葆鏞撰	
論戰之利	愛蓮室主人述意	楽在居侍者措辞
中国俄患成於英日論		上海王豊曾撰
論中国無筋力	美國史蜜司著	甬江王顯理訳
論水	愛蓮室主人著	楽在居侍者訳
連俄連英皆非長策說		如臬吳肇璜撰
軋麥哥郎巴合傳	愛蓮室主人著	楽在居侍者訳
測量海道探淺法	愛蓮室主人著	甬江王顯理訳
理財未議		室山林士毅撰
航海測日法	蓮愛室主人著	甬江王顯理訳
泰西蒙学考	宝山林士毅撰	
論金木土	愛蓮室主人著	甬江王顯理訳
論吳淞沙帶	全上	
原貧	上海王豊曾撰	

また『格致新報』に載せられた主な翻訳雑誌名（6回以上掲載された雑誌）は、以下の通りである¹³⁾。

英国学問報（130回）

法国博学报（38回）

法文博学报（38回）

13) 同前

法国報 (24回)

英国格致報 (16回)

字林報 (14回)

倫敦中国報 (13回)

倫敦中国新聞報 (12回)

英国太晤士報 (11回)

路透電音 (9回)

英国機器報 (9回)

倫敦温故報 (6回)

字林西報 (6回)

ついで、『格致新報』の内容について、3つの論説を取り上げる。すなわち、第1に「動物学」、第2に「論水」、第3に「論金木土」について述べる。

まず、「格致初稿」の第1巻には「論動物類」が載せられている¹⁴⁾。第1に動物と植物と鉱石の比較の中で、動物の特徴が明らかにされている。第2に動物で骨の有るものと動物で骨のないものが取り上げられ、比較されている。

第3に背類動物として馬や人が取り上げられている。第4に圈体類として、ハエやクモなどに触れられている。第5に柔体類としてかたつむりなどが取り上げられている。第6に光芒類としてヒトデなどが取り上げられている。

最後に約旨が載せられている。今それを述べれば、

1. 動物の大旨は、動物は能く長大であり、能く往来活動し、知覚を有し、生死がある。
2. 植物は、能く長大となり、生死が有るが、存在している所から自分から出ることはいできず、知覚もない。
3. 鉱質は、人による移動や事故による変化のきざしがなければ永久に形を改める時がない。
4. 動物族は、4類に分ける。背類、圈体類、柔体類、光芒類である。
5. 背類：動物で骨格のあるものを指す。馬の如きは、背類である。
6. 背類と称する理由は、動物のあらゆる骨のうちで、背に背骨1本があるものである。
7. 背類の動物は、紅血を有す。
8. 圈体類：飛虫、クモ、蜈蚣、硬殻虫、彘の類、すなわち、動物の骨と紅血のない者で、身体が圈の重さなりでできている。たとえば、木虱などは圈体類に属す。
9. 柔体類：骨なく、紅血なく、圈体でないもの。その身体は、軟弱であり、時に殻の中に隠れている。たとえば、ゲジゲジは柔体類である。

14) 『格致新報』第6巻3—7葉

10. 光芒類：その口が体の中心にあり、別類と同じではない。口の四周に尖角があるので、光芒類と名づけている。たとえば、ヒトデとキクメインは皆この類に属している¹⁵⁾。

とあり、動物の特色としては、動き、成長し、知覚、生死があり、背類、圏体類、柔体類、光芒類の4種類に分かれていることが知られる。

ついで、「論水」には、つぎのように述べられている。

水は、常に見るものであるが、細く考察して見ると、元質中の最奥のものである。称して元質とするのは、1つにその体質をなすものだからである。私は、すでに火は体質であるということができないといった。凡そ、物には熱があり、これを発光させるのが火である。水の体質でたしかとするべきものがあれば、金、木、土とは別の1体質であり、1つに水を純一の質としており、他の質と相合することができ、水を元質としているのは古くからである¹⁶⁾。

とあり、古くから水は元質の1つであると考えられて来たことが知られる。

しかし、水が元質でないことは、西洋人によって明らかにされたことがつぎのように述べられている。すなわち、

100年前、仏国の化学者の実験により、水は2種の元素が化合してできたものだとされている。その化合の力は甚だ堅いので、その2元素を分けるより、2元素を化合させて水とする方がし易いのである¹⁷⁾。

といわれており、水が2つの元素からできていることが知られる。

また、その元素については、「水素と酸素は、水の母である。水は、ただ水素だけでできているのでもなければ、酸素だけでできているのでもなく、2つの元素が化合してできたものである」と述べられている¹⁸⁾。

ついで、水素と酸素の特性が述べられ、水素は軽く、酸素は動物を生かすことが大むねいわれており、水にも色があることも述べられている¹⁹⁾。

最後に、水の陸地と海岸における作用がつぎのように述べられている。

近海の地は、その風が甚しく冷くはない。また、甚しく熱くもない。…このため、沿海の住民は内地に較べて多く、近海の地は、朝と晩に一定の風が吹く。また、水が冷えにくく、熱くなりにくいので、晩の間は海と地が皆冷えているが、翌朝、太陽が東から昇ると、海水は熱を受けにくいので、地は海に較べて先ず熱する。地面の空気は熱せら

15) 同前7—8葉

16) 前掲書第9巻6葉

17) 同前

18) 同前7葉

19) 同前

れて昇り、海面の空気に較べて軽いので、海面の冷い空気が入って来て、その欠を補う。これが海風である。日没の時になると、海水は熱が退きにくいので、地は海に較べて先きに冷え、風が出て海に向って行く²⁰⁾。

とあり、海風、陸風の仕組みについて書かれている。

最後に、「論金土木」について見て行く。

まず、

5行の理について、中国人は経伝中で甚だ詳しくこれを言っている。その説はヨーロッパ人の水火土気の4元の説とは、ほとんど異なる。金木は、すでに水火土の中に包まれるべきである。火の如きは、能く金属を製錬し、水土は、能く金属を生じ、火は能く木を製して炭となし、水土は、能く木を生ず。中国人は、別に金木の2条を出しており、西洋人の4元の名義の簡当に及ばない。しかし、相沿って久しく、すでに牢固となり、破るべからざる勢なので、古人の残した古典を棄ててなくすのはよくない。だから、私は、水火の2行を論じた後に気を論じないで、金土木を論じ、華例に遵った²¹⁾。

とあり、中国の5行説とヨーロッパの4元素を比較し、後者がすぐれているが、前者の分類に従って、まず、水、火を述べ、これから金、土、木を論ずるといふ。

金属で用を為すものは、甚だ広く、80の元素のうちで、金属が60を占め、堅くて、光を発する。本体が堅ければ、器を利となすことができ、光を発すれば、宝となすことができる。ある種の土は、内に金属質を含み、酸素と化合して、金属を成している。だから、土を精錬して、金属を得ており、今日の5つの金属などの鉱石は、土中に化合して出てこないものはない。それ故、金土の2行は分けることができないようだ²²⁾。

とあり、金属が元素の中で60種類ぐらいあり、それは、土中に化合して存在していることが知られる。

さらに、木について、

木は、諸質が相合して成り、地気、天時が同じでなければ、生える木も同じでない。いわゆる木は、一切の花、草、穀、果をともに包括している。だから、植物は、皆木というべきであり、炭となり、油となり、顔料となり、香料となり、木の原質は1つではない。すでに概見できるように、木の樹液を取って、乾燥すれば、煤炭となる。煤炭は、2種に分かれ、1つは焼煤であり、石炭と木炭がこれである。1つは晶炭であり、ダイヤモンドがこれである。……今、すべての林が生長し、日に密になるが、もし飲食の源を開かなければ、人類は将さに減びるのである。いわゆる飲食の源で、穀、菜、果、薪

20) 同前8葉

21) 前掲書第12巻8葉

22) 同前

の4者にしくものはない。これらは皆、木が足らざるを済っているのではないか。木の功は顧みれば、大でないとはいえないだろう²³⁾。

とあり、木が燃料やダイヤモンドとなり、飲食にも必要不可欠のものであることが述べられている。また、そのあとに、植物が炭酸ガスを吸って、光合成により成長し、酸素を吐き出し、動物や土壌に益をもたらしていることが書かれている。

最後に中国の5行説について、

中国の5行説には、実に、蛇を画くのくに足を添えているとのそしりがある。私は、5行の義をむやみにとがめるわけにもいかない。惜しむべきは、中国人が5行の生尅の理を借りて、丹を焼き、水銀を精練し、天命は、星トと相関しているとしている。この説は、荒渺としており、証拠がない。愚か者は、術士を侍んで生活し、病いを治す医者のように、5行生尅の理を取り、まつわり、清くない。これらが私の解らない所である²⁴⁾。と述べられており、中国人が5行説に迷信を取り込み生活しているのは解らないとしている。以上、格致新報の内容について考察した。

4. 格致新報の参加者

格致新報により、格致新報の参加者表を表示すれば、以下の通りである²⁵⁾。

報中の役割	氏名	貫籍	官職又はそれに代るもの	報中の役割	氏名	貫籍	官職又はそれに代るもの
本館售報処人	李君緑		京都大柵欄鐘表鋪	本館售報処人	金雅泉		宜昌招商局
〃	趙秀珊		天主堂後門義塾	〃	李一琴		時務学堂
〃	張菊生		西学堂	〃	宋公館		浙江杭嘉道
〃	蔣静軒		播威洋行	〃	壁譚寓		
〃	周維新		同昌棉子行	〃	陶菊如		德隆醬園
〃	陳楚濤		通州招商局	〃	周昌翁		沙市天主堂
〃	黄巨川		江陰招商局	〃	田国翁		荆郡天主堂
〃	馬璧臣		秦興招商局	〃	孔仁翁		寧波舟山天主堂
〃	朱煦亭		鎮江招商局	〃	劉雨香		
〃	盛我盤		揚州電報局	〃	錢第	江蘇	軍機大臣工部尚書
〃	儲馨遠			〃	張集成		華英大藥房
〃	王叔英		蕪湖電報局	〃	楊福翁		香港文裕堂書坊
〃	王賦秋		無湖電報局	〃	左斗		廣東聖教書樓
〃	彭新三		安慶電報局	〃	山翁		広学会
〃	孫詞臣			〃	王文翁		北京琉璃廠給報局
〃	陳霞裳		江左書林	〃	張小翁		鎮江天主堂
〃	吳少雲			〃	股乘翁		揚州缺口門天主堂
〃	劉志布		沙市招商局	〃	王正翁		江西時務報処
〃	劉英如			〃	汪漱翁		泰州天主堂
				〃	姜贊翁		

23) 同前8-9葉

24) 同前9葉

25) 『格致新報』『1~第12冊に見られる者をまとめたものである。』

本館售報処人	翟声翁		湖北時務報処	本館售報処人	項藻馨	浙江
"	吳焯翁		四川棚子書館	"	朱飛	江蘇
"	曹思翁		杭州体仁医院	"	王豊曾	上海
"	莊椿山		南京下関招商局	"	張文彬	上海
"	蒯理郷			"	王幼庭	江蘇
"	朱夔翁		広東中西書局	"	林善貽	江蘇
寄稿者	朱開甲	福建		"	樊葆鏡	上海
"	姜顥	江西		"	朱維新	"
"	王顯理	浙江		"	林士毅	江蘇
"	葉在居			"	吳肇璜	"
"	侍者			"	史蜜司	米国
"	向愛蓮	仏国		"		
"	陸悦理	浙江				

以上の表によれば、参加者として、本館售報処人が45名、寄稿者が17名、計60名であり、その出身地としては、江蘇9名（うち上海3名）、浙江3名、福建、湖北、江西、香港、仏国、米国各1名であり、江蘇と浙江の両省にかたよりが見られる。

また、官職などを見ると、官僚が15名であり、最高位は、軍機大臣・工部尚書（1品）1名、ついで、道具（正4品）1名であり、その他電報局関係者など13名がいる。また、キリスト教関係者は8名で、カトリック6名、プロテスタント2名である。その他報館関係者、商業者各4名、学堂関係者、書籍商各3名である。これによれば、参加者の職業としては、官僚、キリスト教関係者（特にカトリック）にかたよりが見られる。なお、この他に問答欄の質問者として、延べで158人がある。

5. 格致新報の意義

すでに見て来たように、格致新報は、清末に出版された自然科学の雑誌であった。また科学的な知識の普及が十分でなかった当時において、一定の役割を果たしたと思われる。

すなわち、中国人に対する科学的な基礎知識を与える雑誌がほとんどなかった時代において、科学的な知識を与える記事と宣教師による実験や理化学器具の取り次ぎも行われ、中国人に自然科学の知識を普及するのに先駆的な役割を果たしたと思われる。

格致新報に似た雑誌にすでに『益聞録』が見られたが、後者には、単に科学的なものばかりでなく、政治的なものも可成り含まれていた²⁶⁾。

また、『益聞録』においては、キリスト教的な性格が真正面から打る出されていたが、格致新報では、多くのキリスト教関係者が参加していたにもかかわらず、その点には、触れられていなかった。

格致新報は、『中国報学史』によれば、都合により中止され、その後、『益文録』に併合

26) 例えば、『益聞録』の1761号光緒24年3月初9日の目次には、論旨恭録、秦檜論、俄日近情、保教章程、京報照録などが見えている。

されたというが²⁷⁾、その精しい理由、時期は、まだ不明である。

おわりに

いままで『格致新報』について考察して来たが、最後にそのまとめと残された問題点の指摘をして置きたい。

『格致新報』は、1898年3月13日、光緒24年2月21日、上海の新北門外天主堂街29号の格致新報館で第1号が創刊された。

同報によれば、ヨーロッパでは、学問が発達したが、中国では、魏晋の頃学問がすたれ、朱子により、格致入門の要道が明らかにされた。その後、清末に至って、人材養成のために学問報としての格致新報の発行が意図されたのであった。

『格致新報』には、「本館告白」や「售報章程」があり、それらによれば、『格致新報』は通年で4元、1冊、1角3分であり、有益な書物を載せ、学会を作り、実験をしようとしていたことが知られる。また販売所は、65ヶ所あった。

内容としては、論文が36載せられており、翻訳された主な外国誌は、13以上ある。内容を取り上げた論文は、「動物学」、「論水」、「論金木土」であり、「動物学」では、動物、植物、鉱物の別が取り上げられ、動物類には、背類、圈体類、柔体類、光芒類の4種があることが述べられている。

「論水」では、水が中国では昔から元質と考えられて来たが、実際は、水素と酸素の化合物であり、前者は軽く、後者は動物を生かすこと、海水による海風、陸風の作用などについて述べられている。

「論金木土」では、中国の5行説の分類に従って、金、土、木が論じられている。金属は、土中であって化合物として存在していること、木にはすべての植物が含まれており、動物の食物、酸素の供給源として大切であることが述べられており、最後に中国人が5行説に迷信を取り込んでいることを批判している。

『格致新報』の参加者は、集処人が45名、寄稿者が17名おり、出身地としては、江蘇省にかたよりが見られ、官職などを見ると、官僚(15名)、キリスト教関係者(8名)にかたよりが見られ、官僚の最高位は、軍機大臣・工部尚書であった。

意義としては、『格致新報』が記事と実験を通して、中国人に科学的基礎知識を教育する先駆的な役割を果たしている。ただ、問答欄質問者の分析やキリスト教関係者が多くいたにもかかわらず、キリスト教色が伺えなかったのは何故かということと、同報はやがて益聞録に合併されることになったが、その精しい経緯、時期などの解明は、今後の問題としたい。

27) 戈公振前掲書129頁。なお、同書では、『格致新報』が『格致新聞』と書かれている。

〔付記〕 本小論は、1988年度の社会文化史学会の研究発表に加筆したものである。